

# 青髭 1 2

明宏訊

何から何まで試されているような気がする。カルッカソム伯爵をはじめとするこの城の者たち、みなが試験官のような気がしてならない。いったい、アンリは何を試されているのか、昼下がりの陽光に身体を委ねるうちに眠くなった。机の上に広げられているのは、父親が在職中に書き記していた日記のようなものだ。いや、そう呼ぶにはあまりにも機密らしい内容が所せましと書き込まれすぎている。

驚くべきことに、情報のひとつひとつに記号が降られている。凡例は一ページ目に示されている。情報の重要度が五つに分かれているのは当然だが、伯爵に知らせている、知らせていない、という区別には目を開かされた。

どうやら、父親はかなりの信頼を伯爵から勝ち得ていたらしい。それにしても自己の市の瞬間まで、それもかなり前から彼はそれを自覚していたはずである、そうであるはずにもかかわらず、自分にまったく知らせていないとは、どういう魂胆だろうか？試験官のトップは、伯爵じゃなくてむしろ父親のような気さえした。

遠くで馬のいななきが響いてくる。

それは、アンリに軍隊という言葉をつかさせた。そして、次に浮かんだワードは平民である。「日記」をひも解いていくうちに気がついたのだが、伯爵と父親は平民の軍隊の強化を考えているらしい。

そもそも、彼が出奔したころには存在すら考えられなかった。神聖なる戦に赤い血が流れるなどと、当時の常識では考えられなかった。それもたがが10年前のことだ。彼も変わったのだが、世の中も急激に変化しつつある。各国が、平民の軍隊の創設に走っているらしい。

「みな、私に何をさせようとしているのだ!？」

従子爵はやおら立ち上がると机の上にとんと腰かけた。とたんに、扉をノックする音が響いた。

「開いていますよ」

「アンリ殿」

大きな体躯のわりに甲高い声はハムラビの者だ。すこしばかり顔色に紅がさしたのは、日中を過ぎて多少なりとも太陽が傾いたせいではあるまい。気分的に話やすそうなのはこの城内では彼だけのような気がしたからだ。なんとなれば、あの男がオリエントにてどのような青い血に属しているのか、それは最果ての話は彼にとってみればいまいちぴんとこなかったからである。

「ハムラビ殿、私は暇ですよ、あいにくとね…」

「皮肉を申されるな」

しかし、言葉的にやはり話にくい。敬語が外されたり、よけいに入り込んでいたりする。やはり、普段は気軽に使っている母国語があるような気がするが、しかし、この城内のどこに彼の同郷人がいるというのだ？そんな疑問をいきなり本人にぶつけてみるわけにはいかない。

「あなたは父と知己なのですか？」

この異郷人とやりとりしているうちにアンリのナント語までおかしくなってくる。おもわず苦

笑がこぼれる。

「お父上どのは素晴らしい方でした。まさに伯爵家にとっては痛い損失……」  
すべてを明かすことを彼の判断で止めているのか、あるいは、伯爵の意志か、おそらくは後者だろうと判断してこの男をあるていど信用してみることにした。彼の膨れ上がった腹をみているうちになぜか、日記に書かれていた部下らしい人間の名前が浮かんだ。

「父には手勢がいたみたいですが、あなたをご存じか？」

「アンヌ殿が詳しいと思います。なぜなら、彼女こそがお父上の右腕故に」  
右腕？そのような冠が彼女に被せられるとは夢にも思わなかった。しかし、彼女に有名貴族出身という別の冠が被せられていることを思えば、ありえないことではない。だが、あくまでも父親の仕事を手伝っていた、というだけであって、それは右腕とはまったく別の意味であろう。第一印象から受けるギャップに、そもそもそれ自体がアンリの独りよがりすぎなかったのだが、東と西が逆転したような戸惑いを受けていた。

それを見透かしたようなハムラビの言葉がアンリに突き刺さった。

「アンヌ殿が言っていたように、あなた様は権威に弱い」

「故郷では、あなたはどのような地位なのか？」

もう捨て鉢になっていた。

「それを聞いて、判断が変更されると？」

「それは後から考えることにしよう」

「それなりの家門ですよ。あちらの皇帝にとってみれば、どの貴族も帝室の盾にすぎないわけ」

若い従子爵は彼じしんの家と同等だと簡単には安心できなかった。おそらく単にお茶を濁しただけだろう。どうも、オリエントの事情はわからない。向こうでは皇帝に反旗を翻すということがありえないのか、いや、いま、皇帝のイスに座っている家とて、かつては大貴族のひとつにすぎなかったはずだ。

またもや、青年の内なる声を見透かしたように浅黒い肌の異国人は口を開いた。

「よほどのことがない限り、貴族は皇帝に逆らわない。よほどとは、弑逆を意味する」

伯爵家はナント王に名乗りをあげるほどの覚悟があるのか、そう暗に言われているような気がした。すくなくとも、父親ならばそう判断するだろう。

いつの間にか、伯爵家の人間になっていることに気付いた。この感覚だろうか、重要なのは。アンリは彼の声と内なる自分の声とほぼ同時に耳を傾けていた。

かつて、わが父がはたしていた役割を自分に求めているのだろうか？軍隊でいうならば参謀、国政でいうならば国主に忠言する宰相だろうか。何も知らぬ自分がそんなことができるだろうか？王都ナルボンヌでは人を使っていたが、名門とはあくまでも一家を仕切ることだった。しかし、今となってみればどうして、当時は自分のことを青い血の持ち主だとみなしていなかったはずの彼女が責任ある仕事を与えたのだろうか？そういう疑問が残る。

当時のことは当時のこととして、今、アンリが直面している問題は王都において発生しているわけではない。とりあえず当面の目的は、ハムラビだ。いったい、彼に何を応えればいいのか

ろう。

しかし、確かに自分は何かを喋っている。彼は、不快な顔をしているわけではないから、何かおかしいことを言っているわけではあるまい。その程度の認識しか彼との会話においては目覚めてこない。どうやら、彼の故郷とこちらにおける軍事の比較について話しているらしい。当地では何百年前から平民を戦に動員しているらしい。青と赤、両者の役割分担がしっかりできているらしい。

そこに、まったく異界から侵入してきた軍隊に彼らは度胆を抜かれたらしい。青だけで編成された軍隊に、平民が束になってかかろうとも叶うはずがない。青い血にとって赤い血に指示する、いわば、ゲームと化していたオリエントはまったく対応できずに、さんざん、エウロペ軍に蹂躪されたのである、というのは薔薇十字軍の当初の歴史だ。

自分たちの先祖が痛めつけられた歴史を語るというのに、この男はまったく表情を変えない。「あつという間に平民たちが消滅させられていく。戦の駒である赤い血、平民というのは一方で、食糧を生産する動物故に、殲滅されでもしたら、来年はまったく生活が不可能になる、そういう恐怖が貴族たちに来訪した。とって、青い血、自ら戦に出馬しなくなって数世紀が経過、故に、束にかかってくるエウロペの軍隊に対応するためにはかなりの時間が必要だった」

「オリエントではそんなに早く啓蒙思想が起こっていたのかい？」

「単に無駄な血が流れることに嫌疑しただけ」

なぜか、この言葉には無用な抑揚がかかっていた。

話は遠い過去のことではなく、現在に戻っていた。アンリが任される仕事に関しては、アンヌに聞けというわりに、熱っぽく話し始めたのである。

「この城、結界に侵入が不可な程度の青い血を何人も、先の従子爵殿は使っていた」青い血どうしの戦闘では無駄に血が流れすぎるという理由で、長いこと、戦場における伝統が崩れ去ったのだが、貴族でも底辺に住まう連中においては、啓蒙思想家たちも思考外においているらしい。

話しが、アンリが蛇蝎のように嫌っている啓蒙思想家たちに触れると、彼の感情が爆発することになる。

「コルベールや、シラーのような連中は、古代闘技場で死ぬまで戦わせたいものだ。瀕死に至るまで自分の能力を使わずにいられるか見ものだな！」

いきなり感情的になったアンリを物珍しい目でハムラビは見つめた。ちなみに、両者とも王都ナルボンヌにて羽振りを利かしている啓蒙思想家で、王、ピエール4に近侍のように付従っている。両者ともに7人の有力諸侯とまでは言わないが、かなりの名門貴族の出自である。

「思想が武器になるとは、片腹痛い！それなら赤い血を戦場に道持ち込むほうが道理には叶っている」

この思想が政治を動かし、国内を蹂躪していることがアンリには許しがたいことに見える。啓蒙思想家たちが作っている、見えない法律を破れば、貴族たちは一瞬にして過去、幾代にもわたって築いてきた名声を失い、ナント王国内における足を失うのだ。いささか興奮しすぎたと思ったのか、従子爵は机から降りると風に吹かれようと窓を開けた。